

戦艦「大和」をめぐるテクノ・  
ナショナリズム言説のメディア史的研究  
——1950年代の軍事雑誌『丸』の分析を中心に——

Focusing on the analysis of the Japanese military magazine “Maru”  
in the 1950s:

A Media History of Techno-nationalism on the Battleship Yamato

塚原真梨佳\*

## はじめに

### 研究目的

本稿の目的は、戦後日本が「科学技術立国」という理念を掲げ、科学技術と結びついたナショナル・アイデンティティを構築していく中で、戦前の軍事技術開発の歴史がいかに語られ、位置付けられてきたのかを明らかにすることである。本稿では終戦から1950年代までの戦前の軍事技術にまつわる言説を取り扱う。特に旧日本海軍の科学技術の結晶と称される戦艦「大和」を事例として取り上げる。終戦から1950年代における戦艦「大和」の技術的評価をめぐる言説の分析を通じて、戦前の軍事技術開発の歴史がいかに評価されてきたのかを検討したい。

戦後日本の科学技術と結びついたナショナル・アイデンティティを分析する上で戦前の「軍事技術」に着目する理由としては、科学技術立国を理念として掲げる政府と一般大衆の間に自国の科学技術に対する評価・認識の差異

---

\* 立命館大学大学院社会学研究科博士課程後期課程

があることが予測されるためである。1945年8月15日の夕方、鈴木貫太郎首相はラジオ放送にて、新日本建設のためには「今回の戦争における最大欠陥であった科学技術の振興に努める外ない」との談話を発表した<sup>1)</sup>。

さらに、1946年に外務省が作成した『日本経済再建の基本問題』では「過去における日本技術は、日本経済の有する性格と同様に多分に軍事的色彩を持った。即ち技術は直接間接に日本の軍事力を強化する為の手段として利用せられたのである。今や技術は国民に対する奉仕者として、生活環境の改善と生活水準の実質的向上を齎すべき本来の使命に戻らねばならない<sup>2)</sup>。」として、戦前の軍事偏重の科学技術に対する反省と決別が論じられている。

しかし、敗戦の原因を科学技術に帰し、民主的な科学技術振興を目指す政府の言説とは裏腹に、本稿で後述するように、当時の大衆メディアでは戦前の軍国主義の下で発達した軍事技術の優秀性を誇示するような言説が見られる。ここには、政府の科学技術立国という理念とは異なるロジックの科学技術とナショナル・アイデンティティの結びつきが予測される。ゆえに本稿では、戦後社会における戦前の軍事技術開発についての評価やそれらをナショナル・アイデンティティに結びつける言説を分析することで、このロジックに迫りたい。

本稿では、終戦直後から1950年代の戦艦「大和」言説を分析対象として取り上げる。1948年にGHQの占領政策の一環として出版された『真相箱』をはじめ、終戦直後から雑誌や書籍を通じて太平洋戦争の「真相」や「戦記」が語られるようになる。特に占領終結以降はこれまで検閲に押さえ込まれていた反動もあり「戦記もの」ブームが起こる。そのような中で、鈴木首相が敗戦の要因として挙げた「科学戦の敗北」についても検証が行われていくこととなる。戦艦「大和」も検証対象の一つとしてたびたび取り上げられた。

戦艦「大和」は日本海軍の最新鋭戦艦として1934年に竣工した戦艦である。戦前に軍事機密扱いであったために大半の国民がその詳細を知ることのなかった戦艦であるが、終戦後には新聞報道や出版物を通じて広く認知され

ようになる。戦艦「大和」をはじめとする「大和」型戦艦は当時の日本海軍の科学技術の粋を結集して造られた戦艦であるとされ、旧日本海軍の科学技術力を評価する際にしばしば取り上げられる存在であった。一方で、世界最大の排水量と主砲を備えていた「大和」は、大艦巨砲主義という連合艦隊の敗因と目される戦略思想の象徴として批判の対象ともなった。

本稿では、戦艦「大和」の技術史的評価がいかに言説化されたかを把握することを通じて、一般大衆レベルで戦前の軍事技術開発の歴史がいかに認識・受容されていたかを明らかにしたい。

## 先行研究

本稿はまず、科学技術と国民国家のアイデンティティとの結びつきを分析するテクノ・ナショナリズムの歴史社会学的研究として位置付けることができる。先行研究（阿部 2001、伊東 2003、吉見 1997）では、戦後日本社会において科学技術とナショナル・アイデンティティとがいかに結びつけられ、表象されてきたかについて、家電広告の分析などを通じて検証されてきた。これらの研究において、戦後日本のテクノ・ナショナリズムは、戦後復興の過程で占領国であるアメリカを一つの模範として内面化していくアメリカナイゼーションとの関わりや、1980年代のアメリカにおけるジャパン・パニックとの関わりの中で構築されてきたものと分析されている。すなわち、戦後日本のテクノ・ナショナリズム分析はアメリカとの関係性が一つの分析軸となってきたといえる。また、先行研究においては科学技術が敗戦後の日本にとって「非政治的な次元」であったために「ナショナルなもの」を追及しえたことも明らかにされてきた。阿部は『戦後』という時空間において『ナショナルなもの』が、呪われたものとして出発したことが確認できる。（中略）なぜなら『日本的なもの』は過去の忌むべきファシズム体制を彷彿とさせたからである<sup>3)</sup>とし、それゆえに科学技術という一見政治とは無縁の次元において「ナショナルなもの」が追求されたと分析する。すなわ

ち敗戦後の日本にとって科学技術は極めて中立的、普遍的な領域であり戦前のファシズム体制とは縁遠いものとみなされていたとされる。

しかし、これらの研究では主に 1960 年代以降の民生技術に関する言説・表象のみが分析の対象とされてきたため、戦後日本の科学技術を拠り所としたナショナル・アイデンティティの構築過程を検討する上でいくつかの見落としがあると考えられる。先行研究における分析対象が限定的であるために、戦前の科学技術開発の歴史と軍事技術の存在が等閑視されてきたという問題点が指摘できる。阿部は「科学技術立国」というナショナルな企てについて「科学・技術立国の理念において目指された科学や技術の内実が、戦前・戦中のような軍事に特化したものではなく、戦後理念である平和や民主主義を実現すべく非軍事＝民生技術の促進を意味していた点は注目に値する」としているが、一方で本稿が示すように、大衆レベルでは戦前のファシズム体制の所産である戦艦「大和」に対してナショナル・アイデンティティを見出していくような言説が受容されていた。これらのことが見落とされてきたために、戦後日本社会において科学技術がいかなるものとして捉えられてきたのか、科学技術とナショナル・アイデンティティとが結びついていく過程において、戦前の科学技術開発、特に軍事技術開発の歴史が、戦後の民主主義的理念の中でいかに位置付けられていったのかといったことについて未だ十分に明らかにされていないと考えられる。

したがって本稿では、戦艦「大和」という戦前の軍事技術開発の所産についての言説を取り上げることで上記の問いを検討し、先行研究とは異なる視角から戦後日本のテクノ・ナショナリズムの構築過程と内在する論理を解明することを目指す。

また、本稿は広義の戦争の記憶研究、特に「戦記」を対象とした研究群や「ミリタリーカルチャー」を対象とした研究群の一端にも位置付けることができるだろう。戦争の記憶研究においては、戦後日本において先の大戦についての記憶がいかに構築され、物語られてきたかという問題について様々な

角度からアプローチされてきた。本稿も旧軍関係者による戦艦「大和」言説を分析対象として取り扱い、戦艦「大和」をめぐる記憶が戦後いかに語られ、社会の中に位置付けられていったかを分析する研究であり、広義には戦争の記憶研究であるといえる。

戦争体験者、特に兵士の手記や語りを分析した「戦記」「戦争体験記」の研究ではこれまで多くの優れた蓄積がなされてきた（吉田 1995＝2005、成田 2010、福岡 2009 など）。これらの研究では、戦争体験者たちの記憶や語りがいかに受容され、戦後日本社会においていかなる戦争観やナショナル・アイデンティティを形成してきたかが精緻に分析されている。ただし、これらの研究で主たる分析の対象となってきたのは前線を経験した兵士たちの体験であり、本稿で取り上げるような旧軍技術者たちの言説は議論の辺縁に置かれてきた。しかし、本稿の関心でもある「科学技術立国」を主要な理念の一つに掲げた戦後日本において、戦争体験者の記憶がナショナル・アイデンティティの形成にいかなる影響を及ぼしたのかを明らかにする上では、技術開発の主体である旧軍技術者たちの記憶や語りに注目することが不可欠である。ゆえに本稿では、これまであまり取り扱われてこなかった旧軍技術者たちの語りに着目したい。

他方で、近年戦争や軍事に関する事柄を趣味として受容する文化を対象としたミリタリーカルチャー研究が興隆しつつある（ミリタリーカルチャー研究会 2020、佐藤 2021 など）。佐藤は雑誌『丸』の通時的分析を通じて、ミリタリー専門誌である『丸』を媒介として戦争や軍事を教養として身につけようとする規範が共有されていたことを明らかにした<sup>4)</sup>。ただし、これらの研究は本稿と関心領域を共有しつつも、戦争や軍事を趣味ないしは教養として受容する人々の方に観察の力点が置かれている。本稿ではこれらの研究の知見を参照しつつも、当時の書き手たちが戦艦「大和」を作り上げた造艦技術や軍事技術をいかに評価し、言説化してきたかを中心に分析していく。

また、ミリタリーカルチャーやポピュラーカルチャーの中で戦艦「大和」

がいかに言説化、表象されてきたかについての研究（一ノ瀬 2015、2016、塚田 2013）では、日本人にとって戦艦「大和」とは何だったのか、戦艦「大和」を通じていかなるネーションの文化的アイデンティティが構築されてきたのかといった問いが検討されてきた。しかし一ノ瀬、塚田両者ともに戦艦「大和」が戦前の日本人の技術力の優秀性を象徴する存在であったことを指摘しつつも、全体としてはポピュラーカルチャーにおける戦艦「大和」の神格化や文化ナショナリズムの拠り所としての「大和」に主眼が置かれている。一ノ瀬は、戦艦「大和」のことを「科学技術立国」を支える平和技術の源流とみなす言説の存在を指摘しつつもそのような見方は正確性を欠いた自己賛美の物語に過ぎないと退ける。しかしながら、たとえそのような言説が空想的な物語であるとしても、その空想がなぜ共感をもって受け入れられ、またある種のナショナル・アイデンティティを構築しえたのかを問うことには一定の意義があると考ええる。ゆえに本稿では、戦艦「大和」をめぐる言説の中でも特に科学技術やメカニズムに言及した言説に特化して分析を行う。

## 研究方法

本稿では、1945 年から 1959 年までに発行された戦艦「大和」に関する書籍や軍事雑誌を中心とした雑誌記事を分析の対象とする。特に雑誌『丸』を中心に取り上げる。

雑誌『丸』は 1948 年 3 月に聯合プレス社によって創刊された。創刊当初は総合雑誌として刊行されていたが、1956 年頃から戦記や戦史、軍事に特化したミリタリー専門誌へと編集方針を転換させている。『丸』をはじめとする軍事雑誌には、旧軍関係者の筆による戦記やインタビュー記事が多数掲載されており、旧軍関係者が自身の戦争体験を語る言説空間としても機能してきた。本稿が取り上げる 1950 年代においても「戦記ブーム」を牽引し、戦前の科学技術の結晶としての「大和」像や大艦巨砲主義の象徴としての「大和」像を世に定着させる役割を担った。ゆえに『丸』を中心とした軍事

雑誌を分析対象として取り扱う。

本稿ではまず、旧日本海軍の中心的な戦略思想の一つであった大艦巨砲主義をめぐる言説を分析する。大艦巨砲主義とは、大口径の主砲を搭載した重装甲艦である戦艦を中心とした艦隊を結成し、艦隊決戦によって敵勢力を撃滅することを志向する戦略思想である。世界最大の排水量と世界最大の口径の主砲を備える「大和」型戦艦はまさに大艦巨砲主義の象徴ともいえる存在であった。しかし太平洋戦争時には戦闘の主力が航空兵力に移行していたために、大艦巨砲主義に基づいて設計された戦艦は十分な戦果を挙げることができなかった。この大艦巨砲主義から航空兵力中心主義への戦略思想の移行に乗り遅れたことが、旧日本海軍の敗因の一つとして現在でもしばしば批判の対象となる。そして大艦巨砲主義に基づいて設計された「大和」型戦艦もまた、批判の槍玉に挙げられてきた。すなわち大艦巨砲主義をめぐる議論は、戦後における戦艦「大和」の評価やパブリックイメージの形成の一端を担ってきたといえる。ゆえに本稿では、大艦巨砲主義をめぐる議論における戦艦「大和」の評価を分析する。

次に戦艦「大和」の技術史的評価を通時的に分析していく。戦艦に関する主要な言説は、その戦艦が参加した戦闘の「戦記」の他に、戦艦の性能や装備、造艦技術等「メカニズム」に関するものがある。これらのメカニズムにまつわる言説を分析することで、戦艦「大和」の技術史的評価がいかに構築されてきたかを明らかにするとともに、戦前の軍事技術開発の歴史がいかに評価されていたかを検討していく。

そして、特に1950年代後半の言説に見られるようになる「大和」をはじめとした戦艦と「民族の誇り」を結びつける言説にも着目する。GHQによる占領が終結し、戦後10年が経過する頃に差し掛かると『丸』誌上において戦艦に「民族の誇り」を見出すような言説がしばしば登場してくる。これらの言説を分析することで、いかなる理路を経て戦艦に「民族の誇り」が見出されていったのかを検討する。



上記の分析を通じて、終戦後に戦前の軍事技術開発がいかなる文脈で語られ、評価されたのかを明らかにしていきたい。

## 1 章 大艦巨砲主義の象徴としての「大和」

### 1 節 科学戦敗北の象徴としての大艦巨砲主義

戦前に「軍機」扱いであったために、大半の国民がその詳細を知らされていなかった戦艦「大和」であるが、終戦後新聞や出版物を通じてその存在は広く国民の知るところとなる。この時期の「大和」をめぐる言説は、主として旧海軍関係者による先の大戦の総括や戦記の中で構築されていった。彼らの多くは、先の大戦における旧日本海軍の敗因を、日米決戦開戦後に起こった大艦巨砲主義から航空機主力主義への戦略思想の転換に求めた。ゆえに、開戦前に大艦巨砲主義の思想に基づいて計画・設計された戦艦「大和」およびその姉妹艦「武蔵」は、旧日本海軍の首脳陣が拘泥した古い思想である大艦巨砲主義の象徴として批判的となったのである。とはいえ、大艦巨砲主義批判と一口に言っても論者によってそのニュアンスはそれぞれ異なっている。本稿では、この時期に行われた大艦巨砲主義批判を3つの見方に大別する。1つ目が大艦巨砲主義を首脳陣の保守的思想の表れ、科学戦の敗退の結果とみなす見方、2つ目が大艦巨砲主義を敗戦の要因と認めつつも、戦艦から航空機への転換がうまくいかなかったのは致し方ないとする見方、3つ目が抑止力としての大艦巨砲主義の意義を主張する見方である。以下でそれぞれの議論を見ていこう。

まず、1つ目の大艦巨砲主義を首脳陣の保守的思想の表れ、科学戦の敗退と見なす見方についてである。この見方が最も痛烈に大艦巨砲主義を批判する立場であった。

終戦後かなり早い段階で「大艦巨砲主義」という用語を用いて旧日本海軍批判を行った新聞記者の森正蔵は、太平洋戦争における戦略思想の転換を以



下のように総括している。

今次大戦前まで列強の海軍作戦当局を左右した思想は徹底した大艦巨砲主義であつた。戦艦の多寡が海戦の運命を決するものとして建艦競争に乗り出したのである。然しながら海戦の様相はマレー沖海戦を転機として一変した。即ち空軍思想への覚醒である。(中略)とまれ海軍内部においては、終戦直前まで空軍の軽視される傾きのあつたことは見逃せなかつた<sup>5)</sup>。

森は1941年12月のマレー沖海戦において航空機の重要性が示されていたにも関わらず、海軍内部では終戦直前まで空軍(航空兵力)を軽視する傾向があつたことを指摘している<sup>6)</sup>。また、この記述の後「日本の近代科学戦に対する貧困は今次大戦の決定的敗因の一つであつた<sup>7)</sup>と断じている。

「丸」において初めて日本海軍の回顧録を寄稿した、元海軍軍人で駐アメリカ合衆国全権大使であつた野村吉三郎もまた、森同様太平洋戦争の敗因を「之全く科学進歩の差と科学を工業化する力の差に因ると思う<sup>8)</sup>。」と述べている。野村は続けて大和型戦艦3隻が雷撃爆撃にあえなく沈んだことについて「大艦巨砲主義は積極的に見へるが、其實科学の飛躍的に進歩する時代には、保守的現状維持であることを証明した<sup>9)</sup>。」と評し、戦前に「大和」型戦艦を計画・建造した日本海軍の姿勢が保守的であつたことを指摘した。

森や野村は、「大和」型戦艦計画時に大艦巨砲主義という戦備・建艦政策を選択したこと、さらに航空兵力中心に戦略思想の主流が変化した後もその趨勢に対応できなかったことの原因を、科学力・工業力の差によるものと考へていることが読み取れる。両者ともに大艦巨砲主義やそれを採用した旧日本海軍への擁護的発言は見られず、批判的な立場を取っている。ただし、両者の言説は双方とも占領期になされたものであり、GHQの検閲を意識して旧軍擁護・賛美と捉えられかねない表現を避けていた可能性については留意

が必要である。しかし、森や野村のような大艦巨砲主義への拘泥を酌量の余地のない旧海軍の科学戦の敗北とみなす考え方は占領終結後にも確認できる。

例えば、元海軍司令部作戦課長・元海軍大佐の大前敏一と中野五郎は1956年の『丸』臨時増刊号において以下のように述べている。

日本の海軍は明治四十二年以来、アメリカというものを目標にして、いろいろな軍備だとか作戦計画だとか、そういうものを積んできたわけです。それがあのような太平洋戦争の結果に終つたのは、その原因が一体どこにあるか？これが大事な点ですよ。それは航空というものができて来たからです。そしていままでは制海権をとることが、いわゆる戦争の一つの大きなヤマだった。その制海権は何んでとるかという、海上決戦だった。(中略)要するにサイエンスの面に日本は敗けていた。技術も劣っていたし、軍人が科学に対して無関心だった。これは軍人と科学者の両方が悪いと思う<sup>10)</sup>

戦前の日本海軍が長年アメリカを仮想敵国として軍備や作戦計画を準備してきたにも関わらず、太平洋戦争で敗北を喫したのは「航空の登場」によるものだとし、航空機時代に対応できなかったのは科学戦の敗戦であるとみなしている<sup>11)</sup>。後述するが、占領終結後のこの時期には大艦巨砲主義擁護論とも言える言説も登場している。にも関わらず占領期同様の大艦巨砲主義批判が変わらず述べられていることから大艦巨砲主義＝旧日本海軍の科学戦の敗北、旧態依然とした保守的組織の失敗という見方は占領終結後も一定程度定着していたものと考えられる。

また、1957年の「丸」10巻6号では「大和」型第三番艦「信濃」に関する米海軍の論文が翻訳・紹介されている。その冒頭では、大和とその姉妹艦に対し「こんにち、大和とその二隻の姉妹艦について、その中に、かつて、

日本の無益で悲劇的な戦争努力の象徴を発見できる人々はより賢明であり、  
又たしかに健全な思想の持ち主である<sup>12)</sup>。」と日本人の論者以上の痛烈な批判  
がなされている。日本科学の結晶と考えられていた戦艦の建造も科学力、  
工業力、物量で勝る米国側から見れば全くの無益な戦争努力に過ぎなかった  
というわけである。このような辛辣な評価をも掲載していることから、ミリ  
タリー専門誌である『丸』の言説空間でさえも当時の戦艦「大和」評価が必  
ずしも賛美一辺倒ではなかったことがうかがえる。

以上のように、大艦巨砲主義批判派は大艦巨砲主義を日本の「科学戦の敗  
戦」の象徴と捉えていたことがわかる。そして、その敗戦の原因として、大  
艦巨砲主義への拘泥に基づく建艦政策や開戦後の戦略思想の変化への乗り  
遅れを厳しく追及したのである。

## 2 節 大艦巨砲主義一部擁護派の主張

2つ目の見方が、大艦巨砲主義をとった旧日本海軍を一部擁護する見方である。  
このような見解を示す論者のほとんどが、大艦巨砲主義から航空中心  
主義への移行の失敗を敗因と認めつつも、「大和」建艦時に大艦巨砲主義に  
基づいて計画が立案されたのは当時の状況を鑑みれば致し方ないと擁護する  
立場をとる。

例えば、戦艦「大和」設計補佐に携わった元海軍技術大尉の松本喜太郎と  
元海軍大尉の内藤正直は、航空機の発達について以下のように回想してい  
る。

この「大和」級は従来の砲戦だけならば、絶対に不沈であつたのである。  
これが設計された当時、いく度か設計が変更されたとは言え、昭和  
九年か昭和十二年に至る、この四年間は全く戦争らしい戦争はなかつた  
し、航空機がかくの如く急速な発達を遂げようとは、設計當時者の夢想  
だにせぬところであつた<sup>13)</sup>。

先に見た大艦巨砲主義を科学戦の敗戦とみなす見方と異なり、「大和」級は従来の砲戦中心の海戦であれば絶対に不沈の戦艦であったとむしろ「大和」の性能を高く評価している。そして当時の一造船官にとって航空機の急発達は予想だにしないことであったと述べられている。

一方で1956年に『丸』誌上で行われた元海軍関係者5名による座談会にて、開戦当時軍令部第一部長であった福留繁は当時の海軍内部における大艦巨砲主義をめぐる次のような議論があったと証言している。

福留：海軍の兵術思想から見ますと、いやこれは日本だけではありません、世界の兵術思想から見ますと、大艦巨砲の戦艦主義と航空兵力主義との過渡期なんです。それで日本でも山本五十六とか大西瀧次郎など、航空の先覚者と称せられる人は、もはや戦艦時代は去り、母艦時代に入ったということを言い、武蔵・大和を造るのは馬鹿馬鹿しい、武蔵・大和の建造費と維持費をもってすれば戦闘機千機を維持できる。その方がはるかに賢明なんだと、こういうことを言っておったんですが、まだ世界の大勢は、これは惰性もありますが、やはり大艦主義というのが勢力を占めていた。日本でもこの大きな大勢に順応して武蔵・大和を造ったわけです。ところが真珠湾攻撃でははつきりと現代海戦の主力は母艦ということが実証された<sup>14)</sup>。

福留によれば、「大和」型の計画時より日本海軍内部にも航空兵力を重視する意見はあったが、日本海軍のみならず世界の多勢が大艦巨砲主義の路線をとっていたがゆえに、その意見は採用されず「大和」型戦艦が建造されたということである。すなわち先の松本のような現場の造船官はともかく軍令部の首脳陣は必ずしも航空機の発達を予見できていなかったわけではないということが示されている。この福留の「日本海軍内部にも航空機重視の意見が存在した」と「世界の大勢において大艦主義が勢力を占めていた」との

言からは、日本海軍だけが変化に乗り遅れていたわけではないという戦後の大艦巨砲主義悪玉論に対する反論の意思がうかがえよう。この点において福留もまた松本同様、戦艦から航空機へという戦略思想の急転換は実際に開戦するまで実証できるものではなかったとみなしている。

とはいえ、開戦前に最善と考えて計画された「大和」が実際の戦闘でほとんど活用されることがなかったという点については、擁護派も認めるところであったことが分かる。松本のように「大和」の戦艦としての性能自体を高く評価していたとしても「大和」の戦績については擁護し難いものがあったと推察される。

### 3 節 抑止力としての大艦巨砲

他方で、大艦巨砲主義に基づいて世界最大級の戦艦を建造したことをより積極的に肯定・擁護する見解も存在した。それが3つ目の抑止力としての大艦巨砲肯定の見方である。「大和」型戦艦に関する情報は他国への情報流出を防ぐために、軍機保護法において最も秘密重要度の高い軍事機密（軍機）と定められていた。ゆえに日本国民はもちろん米英など諸外国においても「大和」型戦艦の詳細は開戦まで把握できていなかったとされている。艦隊決戦における優位を確保するために「大和」の存在は開戦まで伏せられていたわけであるが、「大和」を抑止力とみる見解においては、「大和」を秘匿するのではなくその存在を知らしめるべきであったと主張される。

「大和はなぜ温存されたか」と題された記事では、「十八インチ砲を、ろくに撃たずに沈んだこの巨艦を何故緒戦から堂々と戦わせなかったのか。これは今後には解決されなければならない問題である」と「大和」の運用法については批判的な眼差しを向けられる。「大和」に対する高い評価と信頼を裏付けとして「大和」を戦争の抑止力とすべきであったと主張されているのである。

米国が開戦前にも日本に想像を絶するような巨艦が建造されつつあることを知ったとしたら、米国の最後通牒がそのような形で、またあの時機に発せられただろうか、と疑問を抱かざるを得ないのだ。その上、十八インチという巨砲が米本土に撃ち込まれるかも知れない、という恐怖が、もしも米国人の心をとらえたとしたらこれほど効果のある心理戦はなかつただろう<sup>15)</sup>。

ここでは、戦争の抑止力としての役割が「大和」に希求されている。このような「大和」に抑止力としての役割を期待する言説においては、「大和」は無用の長物であるどころかアメリカに開戦を躊躇させうる性能を持つ戦艦として高く評価されていることが分かる。

実際には開戦前に抑止力としての役割を果たすことがなかった「大和」であるが、本記事の筆者はさらに、開戦後「大和」の存在を知った米軍にとって「大和」は不安要素であり続けたとして、「日本がかかる巨艦を有していたことも、けつして無用のことではなかつた<sup>16)</sup>」と結んでいる。先に見た2つの大艦巨砲主義批判論とは異なり、開戦後における「大和」の意義をも相当に高く評価していることが特徴的である。それも実際の戦闘における戦闘力としてというよりも、「大和」が存在することによって相手国に与える精神的圧力が評価されている。このような評価には、世界最大の戦艦である「大和」の性能に対する強い信頼がうかがえよう。

以上、ここまで見てきたように一口に大艦巨砲主義批判といえども、そのニュアンスにはいくつかのバリエーションが見られることが分かる。そこでは大艦巨砲主義の極地ともいえる「大和」型戦艦に対する評価にもばらつきが見られた。しかし、「大和」を抑止力として評価する言説を除くと、たとえ「大和」の技術的所産としての性能は一定程度評価したとしても、結果として「大和」が実際の戦闘において「無用の長物」と化したこと自体は、大半の論者の共通認識であったことが本分析から明らかになった。

## 2 章 「大和」を作り上げた造艦技術への評価

### 1 節 元造船官たちの戦艦「大和」賛美論

第1章で見てきた大艦巨砲主義に対する批判は、戦後の戦艦「大和」の「時代遅れの無用の長物」というパブリックイメージを構築する上で一定の影響を及ぼした。しかし、大艦巨砲主義批判の主旨はあくまで「大和」構想時に大艦巨砲主義を採用し航空兵力を軽視した首脳陣の方針への評価、または戦術思想の転換に対応できなかった諸々の原因に対する批判であり、「大和」艦の性能それ自体や造艦技術そのものに対する評価とは必ずしも一致しない。

2章では、メカニズムという文脈において、当時の造艦技術やその所産としての「大和」型戦艦の評価がいかなるものだったのかを分析する。

戦艦「大和」のメカニズムや建艦技術の内容や評価については、福井静夫や松本喜太郎といった旧日本海軍の元造船官らを中心にまとめられていった。彼らの論説は、いわゆるカストリ雑誌や『自然』をはじめとした科学雑誌などを中心に発表されていく。以下、福井、松本両名がいかなる戦艦「大和」解説及び評価を行なったのかをそれぞれ見ていこう。

福井は、1949年10月発行の『探訪読物』にて岡野十二という筆名で「謎の大戦艦『大和』の全貌」という論説を発表している。この福井の大和論において着目すべきは、戦艦「大和」を当時の日本の工業技術の結晶とみなしている点、そして戦艦「大和」を戦後の科学技術立国の礎とみなす言説の萌芽とも言える見解を示している点である。

こゝに特に強調したいのは、単に最大といふばかりでなく、その構造や艤装や諸設備が、当時の日本の工業技術の粋を集めてゐたといふことである<sup>17)</sup>。



すなわち「戦艦大和は科学技術の結晶」という現在まで続く「大和」イメージの登場である。「大和」が「当時の日本の工業技術の粋を集めて」作られていたことを強調することで、戦艦「大和」に単なる兵器以上の意味を与えている。この意味において戦艦「大和」は日本の工業技術力を表象する存在となるのである。

また、福井は同論説の中で「(大和を：引用者補遺)文化施設と云つたのは、その施設そのものが平和日本の再建に必ず利用できるに違いない<sup>18)</sup>」「以て何等かの平和技術に貢献し得るならば、我々の本懐といふべきであらう<sup>19)</sup>。」などと述べている。つまり、福井は戦艦「大和」を作り上げた戦前の工業技術は、戦後の「平和日本の再建」及び「平和技術」に貢献しようとの見解を示している。福井にとって戦艦「大和」の建艦に用いられた軍事技術も、使い途によっては平和技術になりうるものであり、軍事技術と平和技術の間に連続性を見出していることがうかがえる。このような「大和」を造りあげた技術を平和日本の再建へ利用するという福井の発言は、戦前の軍事技術を戦後の科学技術開発の礎とみなす言説の萌芽といえるだろう。

戦前に戦艦「大和」の設計補佐を務めた松本喜太郎も、福井とほぼ同時期に大和のメカニズムを解説する連載を科学雑誌『自然』にて掲載している。この連載を元に出版されたのが『戦艦大和 その生涯の技術報告』である。松本の大和論も福井同様の「大和」賛美論であった。松本は『戦艦大和 その生涯の技術報告』のまえがきにおいて「大和」の設計及び建艦について「確かに日本といわす世界の技術史の一頁を大きく埋めるにふさわしい大事業であつた<sup>20)</sup>。」と高く評価しており、そのような「大和」建艦の技術を後世に伝える意義を「船の姿が技術の進歩に伴つて当然変つてくるべきものとしても、その設計や建艦上の原理的な考え方には変ることのなき永い生命があるものである。この意味に於て大和の技術記録を残すことは、技術の世界にとつて大きな価値のある問題であると確信する次第である<sup>21)</sup>。」と述べている。

松本も福井同様に、戦前の軍事技術開発と戦後の造船技術開発の間に連続性を見出していることが分かる。日本政府は終戦後に軍事技術開発に対する反省と決別を述べているが、福井や松本ら技術者にとって、技術の原理は軍事利用か平和利用かといった用途によって分別されるものではなく、継承されていくべきものという見解を有していたことがうかがえる。

また、松本は科学雑誌『自然』での連載の最終回において「日本人は自己の有する技術能力の優秀性を自覚すべきだ<sup>22)</sup>」と主張している。この主張は戦艦「大和」に象徴される技術能力と日本人というナショナル・アイデンティティを結びつけ、技術能力に日本人としてのナショナル・プライドを見出そうとするものである。

吉見俊哉は、論文「アメリカナイゼーションと文化の政治学」において、家電広告の分析から「一九六〇年代以降、『日本』の技術者たちが『世界』に卓越するテクノロジーを持った主体として描かれるようになる」ことを指摘し、それを「ナショナルな技術主義的『主体性』のイメージの創出」であるとしている<sup>23)</sup>。かつて世界一の戦艦を建造したと自負する松本のような戦前の技術者たちは、そのような戦後社会の動向に先んじて、自己の技術能力なるものを拠り所としてナショナルな主体を立ち上げようとしていたといえるだろう。

ただし、福井や松本が展開したような戦艦「大和」のメカニズムに対する賛美論には異論も存在した。

一ノ瀬は、1950年代の大和言説において戦艦は「技術」ではなく「戦績」で評価されるべきとする主張があったことを指摘している<sup>24)</sup>。例えば、1956年発行の『海と空』においては、「大和」には特筆すべき戦績がないとしつつ「如何に造艦技術は我が国の最高水準を本艦（大和：引用者補遺）によって誇示した処で、就役後その指揮官の巧拙、乗員訓練の良否、搭載公器の精度等が重大な関係をもって艦の運命を左右するのである<sup>25)</sup>」と、造艦技術のことさらに賛美することに対する異論が示されている。

とはいえ、この時期の戦艦「大和」に関する言説を全体的に見ればそのような主張は少数派であり、福井や松本が主張したようなメカニズムの文脈における戦艦大和賛美論は、『丸』をはじめとした軍事雑誌等のメディアを通じて繰り返し再生産されていくことになる。

## 2 節 軍事雑誌『丸』における戦艦「大和」の技術的評価

元連合艦隊司令長官豊田副武は、1951年4巻5号の『丸』誌上におけるインタビュー記事にて以下のような発言を行なっている。

Q. 日本の有していた最高の製艦技術の集積である「大和」級戦艦である。大和、武蔵は興えられた性能を発揮することなく、虚しく海底に没したが、あれは設計上の誤りでもあつたためであるか

A. 否、設計は当時にあつてあらゆる場合を想定して、周到な考慮が拂われていた。しかし、航空機は当時にあつては補助兵力であつたのでこれに対する防御に欠くところはあつた。(中略) 私は「大和」級戦艦は現在でも、欧米の軍艦に比較して、決して優るとも劣らぬ軍艦であつたと信じている<sup>25)</sup>。

豊田は、航空機に対する防御に不足があつたことは認めつつも、敗戦後においても「大和」は欧米の戦艦に優るとも劣らないものであつたと評価している。同時に、インタビューアも「最高の製艦技術の集積」と「大和」を評し、当時の建艦技術の優越性を自明の前提として質問を行なっている。両者の問答からは、前節にて参照したメカニズムの文脈における「大和」賛美論と共通の認識を有していることがうかがえる。すなわち、戦艦「大和」は当時の日本の科学技術の結晶であり、撃沈されてもなおその技術史的評価は何ら損なわれるものではないという認識である。

このような戦艦「大和」と「大和」を作り上げた造艦技術に対する肯定的

評価は占領終結後の「大和」言説にも引き継がれた。例えば、「大和」沈没時の副長であった能村次郎は、旧日本海軍の造艦技術とその所産である「大和」について以下のように評している。

日本が主力艦の建造を始めたのは、日露戦争後であるが、常に列国の一頭地を抜く着想と技術をもって質的の優位を確保して来た。「大和」もその一例であつて、日本造艦技術の優秀さは、「大和」一つをもつて、世界に誇って良いと思う。(中略) この大戦艦「大和」も開戦後急速に発達した航空機との戦いで、ついに最後をとげた。が、延べ千機におよぶ艦載機の集中攻撃にたいし、一機の護衛機もなく、激闘二時間、魚雷二重数本（爆弾は無数）を受けて、ようやく沈んだのである。この強靱さは「大和」を不沈艦と称しても決して不当ではなく、これを計画建造した日本人の榮譽を傷つけるものでもない<sup>26)</sup>。

能村は「大和」を日本の造艦技術の優秀さの象徴として、世界に誇るべきものであると称賛している。また、「大和」は確かに航空機によって撃沈されたが、その強靱さをもって不沈艦と呼ぶにふさわしいと評し、撃沈という戦艦の最期としては不名誉な様子すらも「大和」の技術的優秀性を証明するものと捉えていることが読み取れる。同様に、元海軍中佐の吉田俊雄も、「大和」型戦艦の二番艦である「武蔵」に言及し、「武蔵を造つた日本の設計技術と建造技術は当時世界の群を抜いていた<sup>27)</sup>。」とその優越性を誇示している。

さらにこのような認識は、「大和」や旧日本海軍の批判者にさえも一定程度共通の認識であったと考えられる。1959年の『丸』12巻3号「第二次世界大戦の50大事件」では、「戦後に「大和」の出撃はまったく犬死でありむしろ終戦まで大切に温存して国際連合に日本科学の粋として寄附すべきであつたと唱えるものがある<sup>28)</sup>」と、大和の沖縄出撃を批判する声が紹介され

ている。この記述で目を引くのは「犬死」という強烈な批判以上に、「大和」を日本科学の粹とし、国際連合に寄附する価値のある存在として認めているという点である。「大和」の沖縄出撃を「犬死」と評するような批判者にさえ、「大和」の技術的優秀性は自明のものとして共有されていたことがうかがえる。

そして、『丸』などのメディアを通じて一般読者にも「大和」のメカニズム賛美論は受容されていた。ジャーナリストで軍事評論家の伊藤正徳は、自身の下に戦艦「大和」について読者から質問が多数寄せられるとして、その要約を紹介している。その中で、質問を寄せる読者の「大和」理解の前提として「世界最大の戦艦を造ったその造艦の誇りは民族の名を荷うて世界の歴史に永久に刻まれるものだ。(中略)七万二千トンの巨艦は再び造ることはなくとも、日本がそれだけの能力を持っていたという歴然たる事実、民族の再興に一大精神力を注するものである<sup>29)</sup>。」という認識があると記している。

世界最大の戦艦を作り得たことを誇りとする心情や、日本がそれだけの能力を有していたことは誇るべきものであるとする認識は、これまで見てきた大和賛美論を展開してきた旧軍関係者と共通する認識である。このような共通認識は、論者たる旧軍関係者の言説を読者が受容することによって共有されてきたものであると考えられる。したがって戦艦「大和」は技術史的意義において世界に誇るべき戦艦であるという自負は、論者である旧軍関係者のみに共有された認識ではなく、読者たる一般大衆にも一定程度共感をもって受容され、共有されていたものであるといえるだろう。

ここまで見てきたように、メカニズムの文脈における戦艦「大和」は、世界に優越する戦艦を造り得た造艦能力とともに賛美の対象として評価された。また、複数の論者間において意見の相違が見られることもほとんどなく、評価は定まっていたといえる。そしてそのようなメカニズムの文脈における戦艦「大和」賛美論は、旧軍関係者のみならず、旧日本海軍に対する批判者

や読者にも共有された認識であったことがうかがえる。したがって、上記のような戦艦「大和」をめぐる技術観は、旧軍関係者の書き手を中心に終戦直後から1950年代にかけて構築され、1950年代後半にはすでに一定程度共通認識として広まっていたものと推測される。

### 3章 民族の誇りとしての戦艦

#### 1節 民族の誇りの再興としての戦艦三笠復元運動

松本喜太郎が自身の連載において「日本人は自己の有する技術能力の優秀性を自覚すべきだ」と記したように、「大和」をはじめとした戦艦についての言説は、しばしば日本人の民族性や民族の誇りといった言葉と結び付けられてきた。その傾向は特に1950年代末期に顕著である。本章では、1950年代における言説を中心に戦艦と民族の誇りの結びつきに着目して分析を行う。

1950年代後半に、戦艦が「民族の誇り」として語られた代表例の一つに戦艦「三笠」がある。戦艦「三笠」は明治から大正にかけて旧日本海軍が所有していた戦艦であり、日露戦争において連合艦隊旗艦を務めたことから日露戦争勝利の象徴となり、廃艦後も記念艦として横須賀沖に保存されていた。しかし、太平洋戦争終結後は連合国側によって接収され、その後管理を任された民間企業によってダンスホールなどを備えた遊興施設に作り替えられてしまった。

かつての記念艦の荒廃した姿に日本民族精神の荒廃をみた伊藤正徳は、1957年8月号の『文藝春秋』誌に「三笠の偉大と悲惨－国敗れて記念艦朽つ<sup>30)</sup>」を掲載し、三笠の復元を即時実行することが日本民族の義務であると主張した。この時期『丸』においても三笠解説記事が掲載されている。それらの記事でも、三笠を「日本民族の記念艦」と称し、「忘れ去られようとする民族の誇りといったものを三笠は教えてくれよう<sup>31)</sup>」と三笠に民族の誇り

をが見出されている。

塚田修一は、第二次世界大戦後の記念艦三笠についての研究において、1950年代後半には「“先の戦争の傷痕“がうずく『悪い現在（現実）』ゆえに『良い過去』としてノスタルジックに日露戦争の記憶が希求されたのであった<sup>32)</sup>」と分析している。すなわち、三笠に民族の誇りを見出す論者にとって、敗戦と占領を経たばかりの日本社会は民族の誇りを失った「悪い現在」であり、日露戦争の勝利という「良い過去」の想起を通じて民族の誇りが回復されねばならなかった。その論理において、三笠は戦勝の記憶と結びついた、良い過去の象徴とみなされていた。ゆえに日本民族の黄金時代を想起させるものとして、三笠と民族の誇りが重ね合わせられていたのである。

## 2 節 造艦技術に見出される「民族の誇り」

この時期の『丸』誌上においては、「三笠」のみならず「大和」に対しても同様の傾向が見られる。しかしながら、戦勝の記憶と結びついている「三笠」に対して、「大和」はむしろ太平洋戦争敗戦の象徴ともいえる存在である。敗戦の記憶と分かち難く結びつく「大和」はいかにして民族の誇りとなり得たのだろうか。

「大和」に民族の誇りを見出す論理の好例は、2章でも参照した一般読者の戦艦「大和」観である。先に見たように「大和」に関心を持つ一般読者は、世界最大の戦艦である「大和」を造った造艦技術に民族の誇りを見出していた。つまり、「大和」の戦績ではなく「大和」を造り上げた造艦技術に対して彼らは誇りを抱いていたのである。さらに「日本がそれだけの能力を持っていたという歴然たる事実、民族の再興に一大精神力を注する」として、過去の造艦技術（が達成した偉業）を「良い過去」として民族の再興（＝悪い現在の打破）のための拠り所としている。ここでは、戦前の軍事技術開発の歴史は反省・決別すべき過去というよりもむしろ、自民族の誇るべき黄金時代として認識されていることは注目に値するだろう。



さらに1959年12巻号の『丸』「日本戦艦の魅力」では、「大和」をはじめとする国産戦艦について「その一鋌一鋌には、大和民族の血が流れ、世界に誇る日本独特のメカニズムが表象されていた<sup>33)</sup>。」と評されている。ここでも戦艦は単なるモノではなく、民族の血が通う存在であり、世界に優越する日本独特のメカニズムの表象としてみなされている。

このような戦前の造艦技術に民族の誇りを見出す見方において、戦艦「大和」は単なる兵器以上の意味を持っていたことがわかる。「大和」は世界に優越する自国の技術力の表象であるがゆえに、三笠のような輝かしい「戦績」がなくとも「民族の誇り」として称揚し得たのである。

これらの言説は、科学技術と民族主義的イデオロギーを結びつける一種のテクノ・ナショナリズムとして理解できる。テクノ・ナショナリズムは、狭義には「外国に比した自国の技術力を優位に導くべく、国家主導で「戦略的」技術分野を選別して集中的に実施する技術振興政策の総体<sup>34)</sup>」と理解され、国家的政策との関連で用いられる用語である。だが、本稿ではより広義に「自国の科学技術開発やその所産を拠り所として共同体のアイデンティティを構築していくような活動」と捉え、文化的ナショナリズムの一種として定義したい。

吉野耕作は文化ナショナリズムを「ネーションの文化的アイデンティティが欠如していたり、不安定であったり、脅威にさらされている時に、その創造、維持、強化を通してナショナルな共同体の再生を目指す活動である<sup>35)</sup>。」としている。敗戦、占領期を経て民族の荒廃が嘆かれていた1950年代後半において、戦艦「大和」を世界に誇る日本独自のメカニズムの表象として捉え、そこに民族の誇りを見出そうとする言説はまさに吉野のいう文化ナショナリズムの一形態といえるだろう。さらにいえば、軍事技術が文化的アイデンティティとして認識されていたこともうかがえる。

ここまでみてきたように、占領が終結し自国の力によって本格的な国家の再建が目指されていく中で、荒廃した民族精神の回復が希求されるように

なった。そのような時期において、民族の誇りを呼び起こす過去の黄金時代として戦前の歴史も想起されていくことになる。「三笠」や「大和」はそのような戦前の民族の誇りを呼び起こす象徴としてそれぞれ物語られていった。しかし、同じ戦艦でありながら人々が民族の誇りを見出したのはそれぞれ異なる点にあった。日露戦争の戦勝の記憶と結びついているがゆえにその「戦績」に民族の誇りが見出された「三笠」に対し、敗戦の象徴たる「大和」はその艦体を造り上げた造艦技術に対して民族の誇りが見出されていった。そのような「大和」(を造り上げた造艦技術)を民族の誇りとみなす言説には、科学技術に民族主義的なイデオロギーを結びつけ、科学技術を自国の文化的アイデンティティの一種とみなす認識が読み取れる。すなわち「大和」という科学技術の結晶を媒介として、ナショナルな共同体の再生が試みられていたといえるだろう。

## おわりに

本稿では、戦艦「大和」言説の分析を通じて、敗戦後の日本社会において戦前の軍事技術開発の歴史がいかに語られ、位置付けられてきたのかを検討してきた。まず、「大和」型戦艦の計画・設計における基本思想であった大艦巨砲主義をめぐる議論を整理しつつ、その議論の中で「大和」がいかに評価されていたのかを分析した。その結果、当時の海軍首脳陣が大艦巨砲主義を採用し、開戦後もその方針を転換できなかったことに対する評価には様々な見方があるものの、大艦巨砲主義という前時代の戦略思想に基づいて建艦された「大和」は戦場において実用性がほとんどなかったという軍事・戦史面での低評価は概ね一致していたことが明らかになった。

一方、続く第2章におけるメカニズムの文脈における戦艦「大和」言説の分析では、一転して大和の戦場における運用方法に対して厳しい目を向ける批判者においても、世界最大の排水量と主砲を備える「大和」を建艦した造

艦技術が世界に優越する水準のものであったと高く評価する見解が自明のものとして共有されていたことが明らかとなった。

さらに第3章において、そのような世界に誇る科学技術の象徴であった「大和」が1950年代後半には、世界に誇る日本独自のメカニズムの表象として「民族の誇り」を呼び起こす存在として語られるようになることを示した。そして科学技術の結晶としての「大和」を民族の誇りとみなす言説には、科学技術と民族主義的なイデオロギーを結びつけ、科学技術を共同体の文化的アイデンティティとみなす認識がみられると結論づけた。

以上のことから、戦艦「大和」の建艦という軍事技術開発の歴史は、建艦政策及び戦略思想の面で批判されつつも、「大和」を建艦した具体的な造艦技術については、自国の技術史における偉大な業績として肯定的に評価されていたことが分かる。さらにその偉大な業績は民族の誇りの基礎を成す文化的アイデンティティとして認識されていた。終戦直後、軍事技術への傾倒を反省し訣別を表明した政府の科学技術立国の理念とは裏腹に、大衆メディアの言説空間において、自国の軍事技術開発の歴史とその所産はネーションのアイデンティティの拠り所となりうる存在として肯定的に受容されていたのである。これらの知見は、先行研究がこれまで示してきた、戦後日本のアメリカナイゼーションの一形態としてのテクノ・ナショナリズムや、高度経済成長に伴う諸外国との貿易摩擦を背景としたテクノ・ナショナリズムの説明とは異なる戦後日本のテクノ・ナショナリズムの様相を実証的に示すものであると考えられる。戦後日本の民生技術開発が本格化する1960年代以前から科学技術と民族主義的イデオロギーが結びつく言説が存在し、さらにそれが戦前の軍事技術開発の歴史を拠り所とするものであるという事実は、日本のテクノ・ナショナリズムの歴史的源流を探る上で、先行研究が示してきた起点よりもさらに遡ることができる可能性を示唆している。この点に本稿の学術的意義があると考ええる。

ただし、メカニズムの文脈で「大和」を賛美する言説において「技術」と

「戦績」が切り離されて評価されていたことは留意が必要である。この「技術」と「戦績」の分離は、大艦巨砲主義批判の文脈における「大和」評価とメカニズムの文脈における「大和」評価の不一致に示されている。ここまでみてきた1950年代の戦艦「大和」に対する評価は、実際の戦闘では「無用の長物」でありながら「世界一のメカニズムを有した戦艦」というものであった。このようなねじれた評価は「技術」とその技術によって生産された成果物の「実績・効用」が切り離されて論じられていることに起因する。

当時から戦艦の評価は「技術」ではなく「戦績」によってなされるべきであるとする意見は存在したが、大半の「大和」賛美論は「技術」的側面のみを強調した評価となっている。「大和」のメカニズムを評価する言説の多くがこのように「技術」と「戦績」を切り分けて評価したのは、「大和」に際立った戦功がないという事実によって、「大和」を造り上げることを可能にした造艦技術への評価が損なわれることを避けたためだと推察される。

しかし、結果として「大和」に戦績・戦功と呼べる働きが少なかったために「世界に誇る日本独自のメカニズムの表象」として「大和」を語りえたという可能性についても指摘しておきたい。もしも「大和」が太平洋戦争においてその性能を十分に裏付けるような戦功を挙げていたならば、その戦績は「大和」の技術的優越性の根拠として言及されたであろう。しかしながら、そのような戦績・戦功について肯定的に言及することは、一方で敗戦後の日本社会で忌避された軍国的なものへの肯定・賛美に繋がりがかねない。目立った戦績が少ないがゆえに「優れたメカニズムの表象」としてのみ語ることができた「大和」は、戦前のファシスト体制を背景に成立した軍事技術の産物でありながら、戦前の「呪われたもの」としての政治的色彩を漂白した、非政治的な領域となり得たといえる。阿部は、戦後日本社会において科学技術が一見すると非政治的次元においてナショナルなものを追求できる領域とみなされていたことを指摘していたが、「大和」をめぐる軍事技術についての言説もまた、科学技術を政治的に中立・普遍の領域とみなしていたことがわ

かる。ただし、本来的にファシズムや軍国主義といった政治的次元と不可分であるはずの戦艦「大和」をそのような非政治的領域とみなすには、先行研究が分析対象としてきた民生技術についての言説とは異なるロジックが必要とされた。それが「技術」と「戦績（＝技術の目的・効用）」を切り分けるロジックであり、このロジックによって本来政治的な次元と不可分であるはずの軍事技術を非政治的な領域として物語ることを可能にしていたと考えることができるだろう。

最後に今後の課題と展望を述べる。まず、戦艦「大和」言説の1950年代以降の通時的分析の必要があると考える。1960年代には1950年代半ばより流行し始めた「戦記ブーム」がピークを迎える。また、先行研究が示すように民生技術におけるテクノ・ナショナリズム的言説や表象も登場してくる。さらに高度経済成長期を迎え、科学技術を取り巻く環境は大きく変化していく。そのような時代背景の変化の中で戦艦「大和」言説がいかに展開していくのか、戦後のテクノ・ナショナリズム言説といかなる影響関係にあったのかを明らかにするためにはさらなる長期的な通時的分析が必要である。本稿を足がかりに1960年代以降の分析を行なっていく予定である。

また、本稿では戦前の軍事技術を評価する言説の代表例として戦艦「大和」を重点的に取り上げたため、軍事技術言説といえども旧日本海軍の一戦艦についてのみ当てはまる言説に過ぎないという誹りは免れない。この点については、今後は零戦をはじめとした戦闘機や戦車、また海軍のみならず陸軍の技術開発についての言説も分析対象とすることで解決可能であると考えている。

#### 〈註〉

- 1) 中山茂「科学技術立国」中村政則他編『戦後改革とその遺産』、岩波書店、2005年、111頁
- 2) 外務省特別調査委員会編『日本経済再建の基本問題』外務省調査局、1946年、177頁
- 3) 阿部潔『彷徨えるナショナリズム』、世界思想社、2001年、46頁

- 4) 佐藤彰宣『〈趣味〉としての戦争』、創元社、2021年、196頁
- 5) 森正蔵『旋風二十年 下巻』、1946年、142-144頁
- 6) ただし、一ノ瀬俊也はこの森の大艦巨砲主義批判を「本気で書いていたとは思えない」と疑問を呈している。というのも、森は戦争中同僚の毎日新聞記者が海軍の意に沿って飛行機の重要性を紙面でしきりに訴えていたことを目にしてはいるはずだからである。一ノ瀬は森の大艦巨砲主義批判を、敗戦の原因を軍人に帰することによって一般国民免責論をとったものと指摘している。(一ノ瀬俊也『戦艦武蔵』中公新書、2016年、130-133頁)
- 7) 森正蔵、前掲書、145頁
- 8) 野村吉三郎「日本海軍回顧録」『丸』1巻6号、聯合プレス社、1948年、23頁
- 9) 野村吉三郎、前掲書、23頁
- 10) 大前敏一、中野五郎「日米海軍決戦の全貌」『丸』臨時増刊号、潮書房、1956年、117頁
- 11) 大前敏一、中野五郎、前掲書、150頁
- 12) リン・L・ムーア、エドワード・L・ビーチ「謎の超巨大空母「信濃」」『丸』10巻6号、1957年、潮書房、20頁
- 13) 松本喜太郎、内藤正直「武蔵はなぜ沈んだか」『丸』2巻1号、聯合プレス社、1949年、29頁
- 14) 草加任一、原忠一、小柳富次、福留繁、福井静夫「太平洋戦争三大天王山の真相」、『丸』9巻3号、潮書房、1956年、89頁
- 15) 「特別レポート連合艦隊の七不思議」『丸』12巻10号、潮書房、1959年、132-133頁
- 16) 同上
- 17) 福井静夫「謎の大戦艦「大和」の全貌」『探訪読物』第3巻第11号臨時増刊号、土曜文庫、1949年、16頁
- 18) 福井、前掲書
- 19) 福井、前掲書
- 20) 松本喜太郎『戦艦大和 その生涯の技術報告』再建社、1952年、1頁
- 21) 松本、前掲書、4頁
- 22) 松本喜太郎「戦艦大和ーその生涯」『自然』1950年9月号、79頁
- 23) 吉見俊哉「アメリカナイゼーションと文化の政治学」『現代社会の社会学』岩波書店、1997年、195-196頁
- 24) 一ノ瀬俊也『戦艦大和講義』、人文書院、2015年、130頁
- 25) 「大和」『海と空』、海と空社、1956年、76頁
- 26) 豊田副武・丸編集部「戦艦大和」『丸』4巻5号、聯合プレス社、1951年、104頁
- 27) 能村次郎「戦艦「大和」最後の特攻出撃」『丸』9巻11号、潮書房、1956年、62-63

頁

- 28) 吉田俊雄「最後の超弩級戦艦「武蔵」の生涯」『丸』10巻12号、1957年、潮書房、188頁
- 29) 「第二次世界大戦の50大事件」『丸』12巻3号、潮書房、1959年、247頁
- 30) 伊藤正徳「帝国連合艦隊の最期」『丸』12巻8号、潮書房、1959年、巻頭
- 31) 伊藤正徳「三笠の偉大と悲惨－国敗れて記念艦朽つ」『文藝春秋』1957年8月号、472-483頁
- 32) 「三笠の話」『丸』12巻9号、潮書房、1959年、74-75頁
- 33) 塚田修一「日露戦争の記憶の“敗戦後”史：横須賀・記念艦「三笠」を中心に」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』、2010年、11頁
- 34) 「日本戦艦の魅力」『丸』12巻13号、潮書房、1959年、52頁
- 35) 山田敦「ネオ・テクノ・ナショナリズムの興隆」『一橋論叢』、第123巻1号、2001年、66頁
- 36) 吉野耕作『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版会、1997年、11頁

## 〈参考文献〉

- 阿部潔『彷徨えるナショナリズム』世界思想社、2001年
- 伊東章子「戦後日本社会におけるナショナル・アイデンティティの表象と科学技術」、中谷猛他編『ナショナル・アイデンティティ論の現在』晃洋書房、2003年
- 一ノ瀬俊也『戦艦大和講義』人文書院、2015年
- 一ノ瀬俊也『戦艦武蔵』中公新書、2016年
- 小暮修三『アメリカ雑誌に映る〈日本人〉』青弓社、2008年
- 佐藤彰宣『〈趣味〉としての戦争』、創元社、2021年
- シルヴィア・オストリー・リチャード・R・ネルソン、新田光重訳『テクノ・ナショナリズムの終焉』大村書店、1998年
- 塚田修一「文化ナショナリズムとしての戦艦「大和」言説」『三田社会学』、2013年
- 塚田修一「日露戦争の記憶の“敗戦後”史：横須賀・記念艦「三笠」を中心に」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』、2010年
- 連合軍総司令部民間情報教育局編『真相はかうだ 第1輯』聯合プレス社、1946年
- 成田龍一『「戦争経験」の戦後史』岩波書店、2010年
- 福岡良明『「戦争体験」の戦後史』中公新書、2009年
- 山田敦「ネオ・テクノ・ナショナリズムの興隆」『一橋論叢』、第123巻1号、2001年
- 吉田純編・ミリタリーカルチャー研究会『ミリタリーカルチャー研究』青弓社、2020年
- 吉田裕『兵士たちの戦後史』岩波書店、2011年
- 吉田裕『日本人の戦争観』岩波書店、2005年
- 吉野耕作『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版会、1997年



吉見俊哉「アメリカナイゼーションと文化の政治学」『現代社会の社会学』岩波書店、1997  
年